

の中で見出される差異に関して、行動論的に解釈をおこない、当時の社会を復元していくための方法論を模索していく必要があるだろう。

環状集落の形成過程

—縄文時代中期の下総台地における集落遺跡分布の検討—

井上 早季

はじめに

本発表では、環状集落が周囲の集落遺跡とどのような関係の上に形成されたのかを説明することを目的とし、縄文時代中期の下総台地における環状集落を対象とした検討を行なった。

一 環状集落とは

環状集落とは、縄文時代前期以降に関東・中部・東北地方を中心とした縄文遺跡が集中する東日本で広く見られる、住居が環状ないしは馬蹄形を呈して配置される集落遺跡である。住居域内外に土坑群を伴い、中央部に無遺構空間いわゆる広場を伴うという特徴がある。縄文時代早期末葉から前期初頭に成立し、遺跡数の増減を繰り返しながら中期に最も盛行する。

二 研究の現状と課題設定

環状集落に関する研究史は一九四八年の和島誠一『原始聚落の構

成』に端を発する。一九六〇年代の水野正好の研究を始めとして、環状集落から読み取れる社会についての研究も進展している。一九八〇年代からは、一時的な集落の景観復元をめざすいわゆる「横切りの集落論」がさかんに提起されるようになった。一方、多くの住居が集中し、非常に特徴的な空間構造が認められる環状集落を、他の小規模集落と区分し、縄文時代の拠点集落として認識する意見も多く出されている。

以上の研究史の概観より、環状集落自体の性格に目を向ける研究が多く、環状集落と他の集落遺跡との関係性についての研究は途上であると言える。そこで本発表では、環状集落と周囲の分散居住型集落の分布とそれぞれの住居形成時期を検討した。そのうえで環状集落同士の関係性を明らかにし、環状集落の拠点性の根拠となる、他の集落遺跡との紐帯の存在を考察することを目的とした。

三 分析の背景

発表者は以前、縄文中期の下総台地に位置する中野久木谷頭遺跡・草刈貝塚・高根本戸貝塚を分析し、「下総Aタイプ」「下総Bタイプ」と二区分する分類案を提起した。これは谷口康浩が設定した、外側に住居域、その内側に土坑が密集して環状に巡り、集落中央部は無遺構の場所となる、集落空間の同心円の区分が特徴的に見られる環状集落を指す「下総タイプ」に基づいた区分である。

発表者は、中野久木谷頭遺跡・草刈貝塚を「下総Aタイプ」、高根本戸貝塚を「下総Bタイプ」と区分した。前者は「下総タイプ」

に相当する。後者は住居と土坑の数が下総Aタイプと比べて少なく、住居が環状を呈しながらも間隔を空けて広範囲に点在する。

四 分析の視点と方法

本発表では、対象時期を縄文時代中期、対象地域を房総半島下総台地とした。中期以降県内の集落遺跡の大多数が下総台地縁辺部に位置しており、南部の房総丘陵とは対照的である。

対象遺跡は、環状集落・馬蹄形集落と、馬蹄形・環状貝塚のうち住居域も環状を呈する遺跡とした。上記の基準に該当する遺跡を中心に十九遺跡を選定し、位置関係を示した。さらに比較対象として、当該地域における中期の分散居住型集落のうち、十軒以上の中期住居をもつ九遺跡の位置関係を示した。

五 分析と分析結果

①中野久木谷頭遺跡（下総Aタイプ）

近隣の中山新田I遺跡では阿玉台式期前半にのみ住居が形成されているが、中野久木谷頭遺跡の住居が増加するのは後続する中峠式期以降である。中山新田I遺跡から中野久木谷頭遺跡へ人口が流入した可能性を指摘できる。

②草刈貝塚（下総Aタイプ）

近隣的小金沢貝塚では加曽利EIV式期に住居が増加する。草刈貝塚ではEIV式期以降住居数が減るため、草刈貝塚から小金沢貝塚へ人口が流出した可能性を指摘できる。

③高根木戸貝塚（下総Bタイプ）

近隣の海老ケ作貝塚は、高根木戸貝塚より終焉が早いもののほぼ同時期に住居が形成されており、高根木戸貝塚と海老ケ作貝塚が同時期に併存していた可能性を指摘できる。

六 集落遺跡の形成過程

上記の分析結果から、下総Aタイプの環状集落は周囲の環状集落と強い紐帯を持っていたために、遺跡の開始期や終焉期に、互いに人口の流入・流出を起こしていたと考えられる。対照的に下総Bタイプの環状集落は、周囲の環状集落とつながりを持つほど発達していなかったため、互いに交流することなく独立して並存していたと考えられる。以上の考察より、周囲の環状集落との関係性は、環状集落の機能差を表すと指摘できる。

おわりに

今回の分析を通して、下総Aタイプの環状集落と下総Bタイプの環状集落は、他の集落遺跡との関係性に違いが見られることが明らかになった。今回は環状集落遺跡相互の関係性の検討にとどまったが、今後は環状集落と周囲の集落遺跡との関係性について明らかにしていきたい。